

< 論文 >

日本人英語学習者の「良い読み」の調査研究 —言外の意味を推論しながら読むことの効果—

金子史彦 信州大学教育学部言語教育講座

A Study on “Good Reading” for Japanese EFL Learners -Effects of Inferring Implicit Meaning on Reading Comprehension-

KANEKO Fumihiko: Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

To be able to understand English writing in linguistic sense is one thing, but to be able to read and comprehend it is another. This survey aims to analyze how good readers comprehend English writing. The examinees were given O. Henry’s “After Twenty Years” as the text. While reading the short story, they were to answer questions. Based on their answers, how the examinees read and comprehended were analyzed. The result of the survey showed that, generally speaking, those who succeeded in comprehending the plot tried to infer implicit meaning, while the others ended up summarizing the text passively. Correlation was found between inferring implicit meaning and reading comprehension.

【キーワード】 英文読解 スキーマ 言外の意味 推論 二十年後

1. 英文を読解できるとは

エレベーターの中で“Dogs must be held in arms”という注意書きを見たら人はどう考えるだろうか。多く人は「犬を連れてエレベーターに乗る場合、その犬をフロア上に放さないで下さい」という意味に解釈するであろう。それが最も“常識的”な解釈である。しかしその解釈は「エレベーターとはこういう物であり」「その中で犬を放すとういうことが起こり得る」という既知の情報を手がかりにした推論の結果作り出されたものである。“常識”を一切考えないで純粋にその注意書きの文面だけを解釈するのなら「この中では犬を抱きかかえる義務があります。犬を抱きかかえていない人は乗らないで下さい。犬を連れていない人は当然抱きかかえることが出来ないわけですから乗れません。」という意味でも、言語的には少しも誤りではないのである。にもかかわらずそのような解釈をしないのは、上述のような推論を行うからである。そうして言外の意味を読み取って文の意味を特定する。これが読解である。ここからわかることは、1)言語的に文を理解できるイコールその文の意味を理解できるではないこと、2)文を読んでその意味を理解する、つまり読解とは文に内在する意味を探し出すのではなく、文の意味を推論で作り出すこと、である。

2. 先行研究と本研究の狙い

日本人英語学習者による英文読解に推論がどう関わっているかについてこれまでにいくらかの調査研究がなされている。例えば浅野（2003）は同一の被験者に英語の読解力を調べるためのテストと英文を読んでいる時の思考や態度を調べるためのアンケートを行い、両者の関係を調べた。そして多肢選択型の問題を用いた読解力テストで点数の低かった「未熟な読み手は優れた読み手と比較して、単語のレベルでも、文章のレベルでも、予測や推測のストラテジーを使用する度合いが少ないと言える」と考察している（263）。橋口（2002）も浅野と同じような調査を行い、優れた読み手は「文章の内容を理解するために自分が既に知っている知識や経験を活かすことができる」とアンケートで回答したと述べる（33）。平野（1996）も読解力テストの点数と、アンケート結果から読み取れる読解に対する意識の相関関係を調べた。ただし浅野や橋口と異なり、読解力テストは recall protocol によって測った。そして調査結果を考察して平野は「被験者全体で、5項目に対する認識が読解力と、低い有意な正の関係にあることがわかった。これらの項目は、修正 strategy の1項目を除けば、すべて Text レベルの global strategy（予測、Text 内の情報の統合、Text 全体の意味の把握）」であると述べている（110-111）。浅野、橋口、平野の研究は、テキスト外の知識を活用したりテキスト内での文脈から考えたりして意味を推論することは日本人英語学習者が英文を読解する上で助けとなると主張している。故に前節で述べた私の読解に関する考えを支持する事例となり得る。それでは英文読解と推論というテーマに関して私が調査・研究すべきことはもはや無いのか。答えは否である。

既に見てきた先行研究は、英文読解力と推論の相関関係を立証するにあたってアンケートに依る部分が多い。アンケートとは当然自己申告である。よって「読解をしながら実際に推論を行っているのか否か」は「自身が推論を行っているか否か」というメタ認知の要素が大きく反映されていると考えられる。実際彼等はそれぞれの論文タイトルが示すようにその部分をも研究の対象としているわけである。一方、本研究ではメタ認知は敢えて取り扱わない。自身が認識しているか否かは関係なく、良い読み手は推論をする傾向があるのか、推論は読解を助けるのか、ということ調査し考察するのが本研究のねらいである。それにはどのような調査方法が適しているであろうか。

日本人英語学習者の英文読解ではなく、日本語を学ぶ外国人の日本語読解を扱ったもので注目すべきものがある。大隅（2005）は日本語を学ぶ外国人 20 名に宮沢賢治の『注文の多い料理店』を読ませ、同作品の要点である「このレストランは実は料理を食べさせてくれる場所ではなく、客が食べられてしまう場所であった」ということを理解できている被験者はどのように読んでいるのか調査・分析を行った。そして大隅は、要点を理解することが出来た良い読み手は自身の既存知識と照らし合わせてのテキストの意味の推論や一貫性のチェックを頻繁に行っていたのに対し、それ以外の読み手はそういう行為の頻度が低いとまとめている。これは読解過程そのものを分析する上で非常に有効な調査方法である。本研究は日本人英語学習者を調査対象に大隅の追調査を行った。

3. 調査方法

使用するテキストは大隅が用いた『注文の多い料理店』同様、言語的には理解できても内容を理解できないことが有り得るような、思わぬ展開を見せた末に明確な言葉では結末が明らかにされないで終わるものが好ましい。そのような話は例え翻訳できても読解できなければ“解答”が得られないわけであり、読解できた者とできなかった者の区別がしやすいからである。以上の条件を考慮して、O. Henry の“After Twenty Years”を選んだ。この短編小説は英語の教科書に採用された実績もある。ストーリーを理解していく過程を観察するため、全体を七つに区切り、一つ読み終えるたびに問いに答える形で意見を書かせ、書き終えるまでは次の場面には進ませないように注意した。この調査の主目的は読み方と理解度の関係を調べることであるから、内容の理解にさほど影響がなくかつ難解な表現には注を付けたり平易な表現に修正したりした。資料1がテキストの全文である。被験者に理解へのヒントを与えることを極力避けるため、様々な回答が可能なものを多くした。資料2に掲げる表の左列に付したものが第1部から第7部での各問いである。

「話の冒頭の場面に出てきた警察官が Jimmy であり、Jimmy と Bob は実は再会を果たしていた」ということが上に述べた“解答”であり、それを読み取れた被験者を良い読み手とする。第七部終了時の問いは、それを問うものである。漠然とした問い方であるが、冒頭の警察官=Jimmy という図式はこの話の全てとも言える根幹であり、それが読み取れていれば第七部での回答においてはそれが反映されているのが自然であると判断した。

被験者は、筆者が信州大学教育学部で担当する「英米文学基礎 I」の2008年度の受講生である。この授業は英語の中学校教諭一種免許状取得のための必修科目であり、同免許の取得を目指す学生が専攻の壁を越えて受講している。調査の結果、49の有効回答を得た。

4. 結果

第七部に対する回答を中心に分析した結果、49名中20名が良い読み手であった。彼等良い読み手が各段階でどのような読みをしているのか、どのような特徴があるのかを考察してみたい。49名全員の各段階での回答を完全な形で紹介するのは紙面の制約上難しい為、良い読み手のものは完全な形で紹介し、その他のものは必要に応じて適宜紹介することにする。資料2に掲げる表がそれである。各頁の表の一番上の行の数字は被験者の番号である。つまり、同じ列を縦に見ていけば、その被験者がテキストを読みながら各問いにどのように答えていったかを概観することが出来る。被験者1から20が良い読み手である。

良い読み手の回答を概観して気付くことは、推論を行って言外の意味を読み取ろうとしていることが多いということである。例えば被験者12の第4部に対する回答である。第4部に20年前と比べてかなり背が高くなった Jimmy に対して Bob が驚く（実はこの Jimmy は偽者）場面があるが、被験者12は「20歳を過ぎたのに身長が5cm~7.5cm伸びたなんてことあるのかな、と少し不思議です」というコメントをしている。そして次の第5部、Jimmy が偽者であると Bob が気付く場面を受けて「やっぱり変だと思ったという感じです」

と述べている。被験者 16 も同様の推論を行っている。彼等は、人間は 20 歳を過ぎてからはそんなに身長が伸びない、という根拠に基づいて推論を行っているのである。

この例も、本稿の冒頭で紹介したエレベーターの例も、推論の根拠はその解釈しようとしている文の中にあるのではなく、テキスト外の情報、既存の知識である。一方、テキスト内の情報を根拠とする推論もある。被験者 10 は第 6 部で「今ここにいる人物は本当に Jimmy かますますわからなくなったが、最後に出てきたパトロールマンの手紙から推測すると、パトロールマンが本当の Jimmy ではないかと思われる」と述べている。この第 6 部は背の高い偽物の Jimmy が「It's from Patrolman Wells.」と言って Bob にメモを渡すところで終わっており、そのメモの内容はまだ明らかにされない。また Wells と言及されるだけで Jimmy の名前は出てこない。よって被験者 12 の上述の推論は、テキストのそれまでの部分で数度 Bob の待っている友人が Jimmy Wells であると言及されていることを根拠にしたと判断される。被験者 7 や 14 も第 6 部で Patrolman の名字が Jimmy と同じ Wells であることに着目している。被験者 1・6・12・15・18・20 はこの時点で既に冒頭の警察官が実は Jimmy だと推論をしている、あるいはその可能性を考え始めている。その推論はやはり名字の符合であると思われる。この時点ではまだそれぐらいしか両者を繋ぐ手掛かりとなるものがないからである。被験者 12 は「でも何となく、あの警察官が友達だった感じが最後のほうで出てきました」と述べているが、まさしくその第 6 部の最後で Patrolman Wells への言及があるのである。被験者 18 は明確に「Jimmy は初めて出てきた警察官であった (メモの主が Wells)」と名字の符合が根拠になったことを述べている。

根拠のある解釈が推論であるなら、根拠のないものは単なる想像である。それは例えば被験者 12 の第 1 部に対する回答のようなものである。考えとしては面白いが、そう解釈する根拠が全く示されておらず、実際に見当たらないため、単なる想像と判断される。第 3 部に関しては問い自体が自由な想像を促すような性質のものだったためか、多くの被験者の回答がそうであった。また、余りにも明白な、推論するまでもないような“推論”も見受けられた。例えば被験者 11 の第 5 部の回答で「鼻の形がジミーと違うものだとわかり、疑念を抱いたのであろう」というコメントがある。これは推論するまでもなくテキスト中に書かれていることである。こういったものは推論とは見なさないこととする。第 2 部の回答で「約束を守る律儀な人、友情に熱い人」というものはほとんど全ての被験者が書いている。これは Bob が 20 年前の約束を守るという事からの推論ではあろうが、余りにも明白な推論するまでもないものである。例えるなら、雪が降っているという記述から寒い季節であると推論するようなものである。これも今回は推論の範疇から除外した。

この基準で資料 2 で推論の部分に下線を引いた。推論を行っていないのは被験者 3, 8, 13 と 20 名中 3 名だけである。一方、残りの 29 名、つまり話の要点が読み取れなかった読み手のうち、推論を行っているのは 9 名であった。整理すれば、推論を行った読み手 26 名中で正答者は 17 名、行わなかった読み手 23 名中では 3 名である。正答率は推論を行った読み手が 65%、行わなかった読み手は 13%となる (小数点以下第 1 位四捨五入)。

5. 考察

このように調査結果を分析すると、推論と読解の正答率に正の相関関係が認められた。推論が読解を助けるという面をもう少し考察してみよう。文を言語的に理解できることと読解できることは同じではないと再三述べてきたが、それは文を言語的に完全には理解できなくてもその内容を理解できるということも有り得る、ということでもある。その意味で特に注目すべきは被験者 12 である。第 6 部への回答で被験者 12 は「第 6 部の意味が全体的に分からないのですが」と述べる。実際、それに続く「she と station がどこから出てきたのか分かりません」というコメントは同被験者が言語的に完全に理解できていないことを示している。それにも関わらず「でも何となく、あの警察官が友達だった感じが最後のほうで出てきました」と、この段階で既に結末に気が付き始めているのである。これは前節で分析したように、Bob が 20 年ぶりの再会をしようとしていた友人の Jimmy Wells と Patrolman Wells の姓の一致に着目し推論をした結果であると考えるのが自然である。

逆に、言語的には理解していながら、その内容の意味を理解できないということも有り得るのか。正答できなかった被験者の回答を通じて見てみよう。良い読み手以外の回答は推論が余り行われていないと上で述べた。それでは彼等の回答はどのような種類のものが多いのかといえば、テキストの要約である。被験者 21 は要約に終始している典型例である。そして「ジミーとボブは結局会うことが出来なかった」と第 7 部で述べているように、冒頭の警察官 = Jimmy の図式を理解出来ていない。被験者 21 の回答を順に従って見ると、第 6 部に入って急に断片的な情報の羅列になり、全体としてまとまりのない文になっているのがわかる。同一のテキストであるにも関わらず途中で読みが急変しているのはその内容面に帰せられるであろう。第 7 部で全てが明らかになるわけだが、それは直接述べられているわけではなく、それまで出てきた情報をつなぎあわせて推論を行う必要がある。被験者 21 はそれを行わず、目の前に出てくる文をその場その場で受動的に理解するだけにとどまっている。よって話が直線的に進んでいく第 5 部までとそれ以降では回答の質が変わっているのであり、言語的にはテキストを理解しながら読解できていないのであろう。

6. まとめと課題

今回の調査では、良い読み手はそうでない読み手に比して推論を行いながらテキストを読む傾向があり、また推論が英語力を補い読解を助ける面も認められた。本研究はリーディングの指導に役に立てることが出来る。先ず“After Twenty Years”のような受動的にプロットを追っていただけでは内容を理解し難い英文を読解演習させることで、推論しながら読むことの訓練をする。また、本調査のデータやその分析を紹介することにより、推論の効果を認知させることが出来る。第 2 節で取り上げた浅野、橋口、平野の研究によれば、そのようなメタ認知は読解力の向上に寄与する。言葉で「推論しながら読むことが重要である」と言うだけよりも、実際のデータを提示して指導するほうが効果が期待できる。

課題としては、推論するしないではなく、被験者の英語力のレベルによって読解できた

かどうかが決まってしまったのではないかという疑問も起こり得る。この疑問を解決するには英語力を測るテストを併用することが有効であると思われる。また、今回とは逆に結末を理解できなかった読み手に焦点を当てた研究、どこでどう躓いたのかの分析も必要であろう。それにより良い読みをより掘り下げることができる。いずれも今後の課題である。

文献

浅野敏朗, 2003, 英文読解のメタ認知: 優れた読み手と未熟な読み手の比較, 中部地区英語教育学会紀要, 33, pp.259-266

大隅敦子, 2005, 第2言語学習者はテキストをどう読んでいるか, 国際交流基金 日本語教育紀要, 1, pp.37-51

橋口美紀, 2002, 大学生の読解ストラテジーに対する認識と読解能力との関係について, 鹿屋体育大学学術研究紀要, 27, pp.29-41

平野絹枝, 1996, 日本人大学生の読解ストラテジーに対する認識と読解力, 英語学力との関係, 渡辺時夫(編), 新しい読みの指導 目的を持ったリーディング, 東京:三省堂, pp.100-114

資料 1

第1部: The policeman on the beat moved up the avenue impressively. The impressiveness was habitual. There were few people. The time was about 10 o'clock at night. The majority of the doors belonged to business places that had long since been closed. When about midway of a certain block the policeman suddenly slowed his walk. In the doorway of a darkened hardware store, a man was standing, with an unlighted cigar in his mouth. As the policeman walked up to him the man started talking. 第2部: "It's all right, officer," he said, reassuringly. "I'm just waiting for a friend. It's an appointment made twenty years ago. It sounds a little funny to you, doesn't it? Well, I'll explain. About that long ago there used to be a restaurant where this store stands--'Big Joe' Brady's restaurant." "The restaurant was torn down five years ago." The man in the doorway struck a match and lit his cigar. The light showed a pale, square-jawed face with keen eyes, and a little white scar near his right eyebrow. His scarf pin was a large diamond, oddly set. "Twenty years ago to-night," said the man, "I had dinner here at 'Big Joe' Brady's with Jimmy Wells, my best friend. He is the finest guy in the world. He and I were raised here in New York, just like two brothers, together. I was eighteen and Jimmy was twenty. The next morning I was to start for the West to make my fortune. You couldn't have dragged Jimmy out of New York; he thought it was the only place on earth. Well, we agreed that night that we would meet here again exactly twenty years from that date and time, no matter what our conditions might be." 第3部: "It sounds pretty interesting," said the policeman. "Haven't you heard from your friend since you left?" "Well, yes, for a time we corresponded," said the other.

"But after a year or two we lost track of each other. You see, the West is a pretty big proposition, and I kept hustling around over it pretty lively. But I know Jimmy will meet me here if he's alive, for he always was most faithful guy in the world. He'll never forget. I came a thousand miles to stand in this door to-night." The waiting man pulled out a handsome watch, the lids of it set with small diamonds. "Three minutes to ten," he announced. "It was exactly ten o'clock when we parted here at the restaurant door." "You did pretty well in the West, didn't you?" asked the policeman. "Yes! I hope Jimmy has done half as well. He was a kind of plodder, though, good fellow as he was. I've had to compete with some of the sharpest wits going to get my pile." The policeman twirled his club and took a step or two. "I'll be on my way. Hope your friend comes around all right. Good-night, sir," said the policeman, and left. 第4部: About twenty minutes the man from the West waited, and then a tall man in a long overcoat hurried across from the opposite side of the street. He went directly to the waiting man. "Is that you, Bob?" he asked, doubtfully. "Is that you, Jimmy Wells?" cried the man in the door. "Bless my heart!" exclaimed the new arrival, grasping both the other's hands with his own. "It's Bob, sure as fate. I was certain I'd find you here if you were still in existence. Well, well, well! --twenty years is a long time. The restaurant is gone, Bob; I wish it had lasted, so we could have had another dinner there. How has the West treated you, old man?" "Bully; it has given me everything I asked it for. You've changed lots, Jimmy. I never thought you were so tall by two or three inches." "Oh, I grew a bit after I was twenty." "Are you doing well in New York, Jimmy?" "Moderately. I have a position in one of the city departments. Come on, Bob; we'll go around to a place I know of, and have a good long talk about old times." The two men started up the street, arm in arm. The man from the West, his egotism enlarged by success, was beginning to outline the history of his career. The other listened with interest. 第5部: At the corner stood a drug store, brilliant with electric lights. When they came into this glare each of them turned simultaneously to gaze upon the other's face. The man from the West stopped suddenly and released his arm. "You're not Jimmy Wells," he snapped. "Twenty years is a long time, but not long enough to change a man's nose from a Roman to a pug." (Roman nose=わし鼻, pug nose=しし鼻) 第6部: "It sometimes changes a good man into a bad one, said the tall man. "You've been under arrest for ten minutes. Going quietly, are you? That's sensible. Now, before we go on to the station here's a note I was asked to hand you. You may read it here at the window. It's from Patrolman Wells." 第7部: The man from the West unfolded the little piece of paper handed to him. His hand was steady when he began to read, but it trembled a little by the time he had finished. The note was rather short: "Bob: I was at the appointed place on time. When you struck the match to light your cigar I saw it was the face of the man wanted in Chicago. Somehow I couldn't arrest you myself, so I went around and got a plain clothes man to do the job. JIMMY."

	17	18	19	20	21
この警察官は何をしているのだと思いますか。	犯人を追いかけている。	夜の巡回をしている。	聞き込み調査？	夜の見回り	大通りの見回りをしている。夜中の警備。高価な絵画を守る役目を持つ。見回りをするうちに男から話かけられる。
この西部から来た男はどのような人物だと思いますか。	事業に成功した金持ち。その仕事は悪いことだと思う。20年前の約束を守るために友達を守りに来た。	貧しいことや、傷痕があること。更に似つかわしくないダイヤモンドのピンをしていることから、お金を積んでいた時期もあったが、失敗して今は犯罪をおかしたか、貧乏になっていないかと思ってしまう。しかし友達との思い出を心に留めておいたこと、約束を守りに来たことから過去に對する思い入れが強いのではないだろうか。	20年前に何か大きなことをした。タイムピンがダイヤと書かれているから、お金に關係することでは？	20年前に交わした約束を守り友達を待っている人。見た目は背白く角ばった顔に鋭い眼、小さな白い傷あとが右のまゆめあたりにある。人相の悪そうな人。大きなダイヤモンドをつけていることからも悪い人ではないが、友人と再会できることを信じている。	以前この場所に来たことがある。ビッグジョーというレストランを知っていて、この場所で友達を待っている。20年前にここで別れ、お互いに大切な人を見つけ、富を築く約束をし、また会うことにした。友達はジミーという名で、この男は今38歳。ジミーは40歳。
この後この話はどのようなと思いますか。	友達と感動の再会。ハッピーエンド。	Jimmyはもう亡くなっていて現れない。男は30分しか待たないと諦めたが、一晩中待っている。警察官はJimmyを知っていて、彼から手紙をもらっており、男に渡すのではない。	警官が、男と一旦は別れたけど再び何かで関わることになる。待ち合せている男のほうに会うとか...	西部から来た男の待つ友人Jimmyが時間ちょうどに現れる。そして2人は20年ぶりに再会を果たす。	彼等はお互いに文通をしていたが、1、2年後には互いの足跡を見失ってしまっている。しかも西部はとても広い。しかし男はジミーは生きている限り自分に会いに来ると信じている。だが、警官もうずうず気づいているように、きっとジミーは来ないだろう。
自由記述	20年ぶりに再会した2人はお互いにとてもうれしそう。また2人も20年前とは変わっていきつつある。いい話の気がしてきた。	Jimmyに会えたが、あまりにも変わったことさうな人ではないだろうか。ここでハッピーエンドにはならないと思う。	会えただけで、お互い20年前に別れた後で成功したのかな。そうしたら何か大きなことを成し遂げたわけじゃないのかな。	20年ぶりに2人がお互いに約束を覚えていて、約束を守ったことで再会できて良かったと思う。20年ぶりでも見た目は変わっていても出会うと20年前のように仲良くなれてすごい。約束していたとはいえず、すごい奇跡みたいなことだと思った。	20年もの間、別れた友のことを思い、約束を果たそうとする男はすごいと思ったが、どうしてそこまで信じているのか。出来たのかわからない。よほど強い絆で結ばれている確信があるのだろうか。でもジミーとボブがついに会えた！よかった！
自由記述	ボブは薬局の明かりに照らされた友達の顔が違ったのでジミーではないと思った。	明るみで顔を見ると違う人であった。初めに警官が来たことから、Bobは犯罪者であり強盗され通報されたのではないだろうか。そしてJimmyは生きていて警察の上に立っており、Bobを捕まえるために20年前の約束を利用したのではないだろうか。この大きな男も警官でBobを逮捕するのでは。	ジミーじゃなかったんだ！新たな展開です。この後どうなるんだろ。ジミーに何か起きたのかな。	Jimmy Wells は本人ではないの？ 明るい所に出てよく見たら鼻の形が違ってくることに気づく。Bobはすごい。20年経ってこんな顔になっていそうなのに。	二人が立っている場所には光が降り注ぎ、その様子が希望に満ちている感じだったのに、突然顔を上げた瞬間にボブが叫んだことに驚いた。「ジミーじゃない！20年は長いけれど、ボブのような鼻が変わるほどの時間ではない」というボブの言葉に驚いた。友だからこそ気づいたのだろうか。
自由記述	ボブは警察に捕まった。ジミーはボブをどこかに連れていこうとしている。ジミーはパトロールしている人に頼まれた紙をボブに渡した。	やはりBobは何か犯罪を犯したのだと思う。しかしJimmyは初めて出てきた警察官であった(ボブの目がWells)。	あれ？つかまってしまおうのでしょうか。何だかボブが一方的に色々なことを言われている様子。	Chicagoはいったい何？ 人なのか地名なのか。Bobと話したがっている人？ Silky Bobは何を言っているの？ え？パトロールの人が本当のJimmy Wellsだったの？ 手紙を読めば全部わかるのかな。と思った。	いい人だった男があるとき1つの悪事で変わる。この10分間で逮捕された。ボブ、通称「シルキー・ボブ」話したいという人がいる。一緒に来てくれないか。駅に行く前に読んでほしいと手渡された紙。これはパトロールマン、ウィルスのもの。
結局ジミーとボブは当初の目的を達成できたのですか。	最初の警察がジミーに火をつけるときにボブの顔が見えたが、シカゴで指名手配されている顔だったので、自分の立場上、ジミーだということを明かさなかった。2人は約束通りに会っていたので、当初の目的は達成できた。	約束の時間に会えたわけだから、目的は達成していると思う。Bobが思うようにJimmyはまじめな男で、自ら逮捕はできなかったが、警察としての任務を遂行したのだと思う。Jimmyは最初から手配の男がBobだと知っていたのだろうか。タバコに火をつけた時に気づいたのであれば、Jimmyはただ友との約束を果たしにきたのだと思う。	あの警官がジミーだったのか！ 結局、2人は会うことができていたのだから、目標は達成できたのだと思います。	ボブはジミーだとは気がなかったが、再会はできていた。ジミーはボブに気づいている。けれど、ボブがシカゴで指名手配されていることに気がついたジミーは再会してしまうと仕事上そのままだと後悔してしまわないで、ジミーであることは言わないで去ってしまった。	ジミーとボブは結局会うことが出来なかった。ジミーはどうしても自分自身でボブを逮捕せず、同僚に頼んだ。

(2009年5月7日 受付)
(2009年9月24日 受理)